

繪本回村物語 三

~ 13  
3300  
3



へ13  
3300  
3

復讐 田村物語 卷之三  
奇説

大正十八年八月  
本大學出版部

第五回

名家の災

武關

川上 鯉 老 人 編輯

下流 梅梢軒 關旭 訂正

舞と秋と行かぬ空の通ひ路を。かゝる涼し風や吹らんと護れ  
頃もとや三伏の未なりし。或夕暮段がた暑と避んとて西市  
と世代心ととも。四条河原の納涼。今此所の納涼は六月七日  
清く又暮し。寂くは家号や記せし燈の光も賑し。さすまれば  
とれ女の流石都の風俗。雲の鬢は花の顔粧もあれ  
ばあつり願ふ今秋の小哥唄。男もあり。女は幸は兒童乃  
むぐこれあれ。願のそぐもあつて笑の奴もありて。己が懐くも

も。いとおうあふいとりて。覺て正市の暫く旅の憂は忘す。こ  
彼所と見物二世中。年の頃十六七も。御曹司の只一人  
面と美玉の如く。目秀眉清らう。頭も端反の笠。衣は  
紫の緑のらと。いのと纏ひ。腰は銀の太刀。巾着は  
袴高く撮あげ。遠乗ふ忍びく。あせり。有杖。月毛。駒の  
飾をせ。靴を居り。立四方。手巾。鞭を結び。白泡。おれ。響  
自りて。馬水。かんとせし。時息と限り。後。かけ。おれ。  
内親信の臣と。之て。中く。お遣付。後。替。響と取。一度  
之笑ひ。一度。あつと息。は。折。忽。大勢。立。隆。東  
東西。走り。南北。迷。正市。世代。他。も。珍。車。物。出。ぬ。ら。んと。傍。お。あ。て。入。て。あ。は。ば。あ。ひ。も。あ。ら。ん。ど。

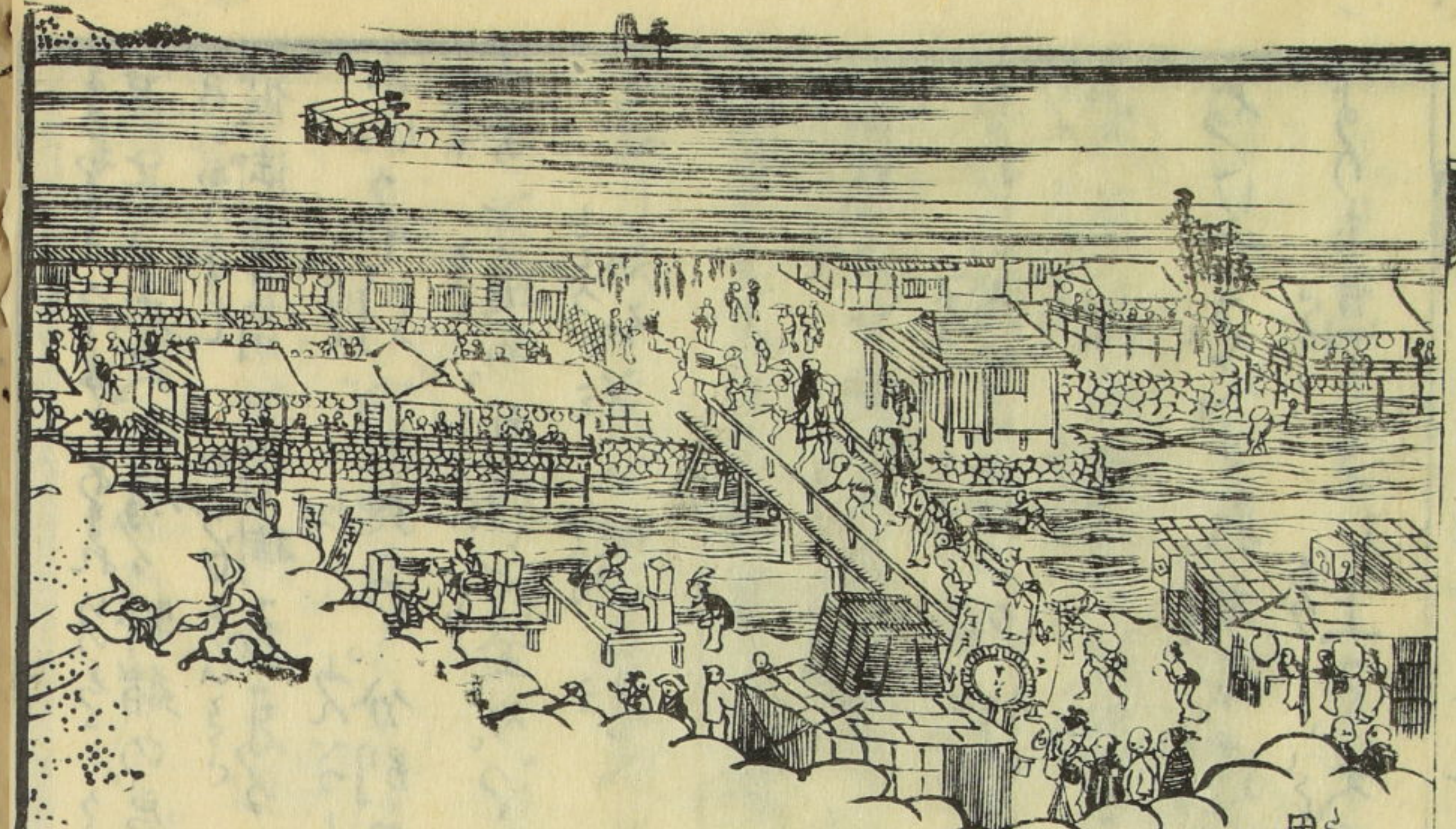
其丈と六尺。野猪の肩の。血。小。流。は。吼。狂。て。一。文。字。お  
彼御曹司と。目。掛。お。あ。る。に。避。ん。と。それ。も。人。の。林。を。為。れ。ば。跡。く  
い。う。で。引。げ。れ。地。も。分。別。思。案。の。間。も。な。れ。御。曹。司。の。か。と。極。く  
一。歩。と。進。め。五。歩。を。堅。め。い。ら。り。て。お。あ。る。野。猪。の。あ。り。や。牙。と。突。ま。ん  
と。せ。し。処。を。お。と。燃。と。え。し。う。力。は。任。て。微。塵。お。な。れ。と。蹴。り。り。け。お。い  
何。あ。る。と。お。し。御。曹。司。の。野。猪。諸。も。た。右。お。も。と。と。倒。よ。り。野。猪。を  
益。怒。り。を。お。し。又。お。上。つ。御。曹。司。の。起。ま。ん。と。せ。し。引。手。の。お。お。あ。る  
を。か。ひ。潜。て。右。お。外。又。う。ら。向。へ。た。は。避。ま。れ。小。蝶。の。閃。く。と。お。あ  
變。萬。化。の。働。さ。に。怒。り。つ。野。猪。も。前。後。左。右。お。度。と。失。ひ。勢  
あ。け。て。お。え。と。れ。処。を。透。を。伺。ひ。四。足。を。獲。ぶ。け。の。ま。あ。り。月  
よ。り。も。高。く。と。し。上。る。大。喝。一。声。大。地。へ。ど。ろ。ど。ろ。投。つ。く。と。は。地。響。に



日寸角西野三川

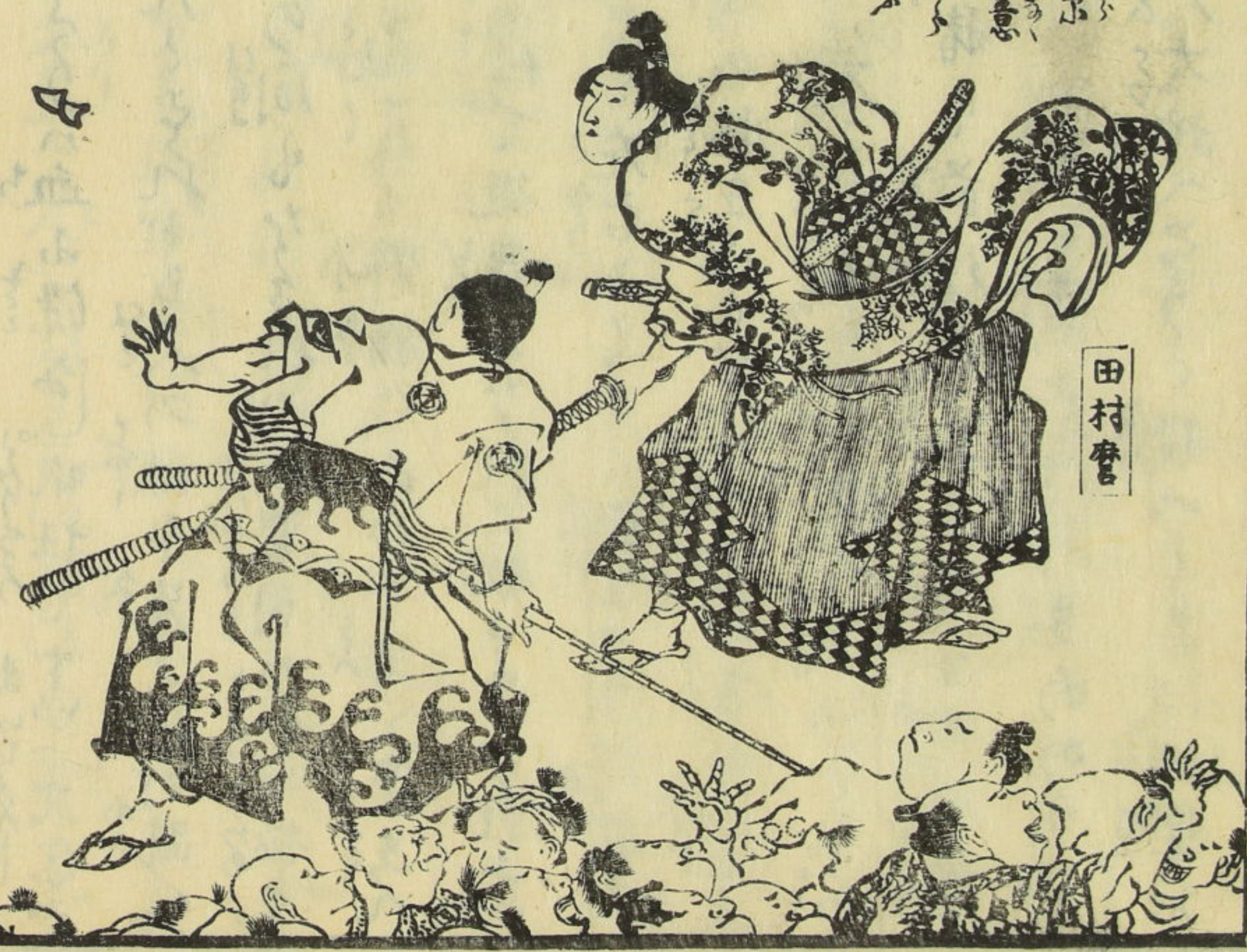
関正市

世代作



日本各言集三十二

田村磨  
四茶川系  
少て不意  
勇と中  
やま



田村磨

山の崩る如く。さしめの大野猪のけこま成りてを震じ。  
 四足を動し吼声鯨鐘のごとく。暫時お息を収めたる目見え  
 くも亦おそろしかりければ働なり。是をみるより 數百の兎物同  
 音お賞嘆の声をいじり鳴り止まりければ。此野猪のたれ。あつ  
 事少て。此所お狂ひおどると。其所以と尋ねお。とある様  
 師の生れ熊膽猪膽をど鬻て。過つひと成せぬ人の山より打  
 留る野猪の未死もやれを。其うに四足お縛りて守りて  
 邑お持するとして。道めて捕し繩の切とられ。矢はねも。うはて匪  
 子みや。取逃せるみやぞ有りければ。斯く彼公を。小袴の塵お拂ひ  
 籠の紐川メは。完爾と笑つて。駒お打棄一鞭うとて。乗出る  
 御風情美男といひ勇力と云。威風お州も打靡て足撥お早と

行駒の跡も追み隔おあぞ。猶後とくに騎馬の供人お行立の  
 供人も跡を慕つて走り行ぬ。正市に此有るまは始終おらえて。  
 深くも感じつ。何れいごとこの公なるか。かゝる主君お仕へて。日  
 比の本意も違とわれと。頻にお公動とて。是彼と尋ねお。諸人  
 の内お知る人ありて。らく。御才の是を知らぬとや。忝くも從之  
 佐右衛門督坂上の蒨田實の所子。田村實とて。仁心至孝智勇  
 兼彼の良將おて在なり。今朝とて。二三十騎がお打群  
 て嵯峨の奥おじて。おまふ有るまは。おえ請しが。今ぞ其歸りの急  
 とまふおなるべしなど。細くと物語り。正市頼を撰て。満面喜悅の  
 笑を顯し。我鄙お住居といふも。仄お此公の高を。おまは。果  
 ちぞ。其実おたがふんと。獨り雀踊く。欽び。是よりいづく。使

成りて終ふ。新田磨の家小腰と仕宦も就たれが。日夜公を信  
 信守りに勤まれば。又も追々昇進して。然も田村磨の中謝の列小  
 加りて。いよいよつうの間も忠勤怠ぶれば。田村磨の恩澤も清々  
 らざ。召仕られ。たれあぞ。正市へ。続小一の素懐を遂て。かの行敷  
 居士より受る所の千手観音の隠篆二枚を取出し。田村磨を捧  
 て。其所以を審よ語り。月雪姫も病臥多めと。父は行敷との  
 隠篆を謁仰し。あひなぶ。其驗もあふんとして。執りければ。田村磨  
 と篤実の御生質なれば。御飲浅く。一枚は。そのは。成速て。月雪  
 姫の方へ贈られ。一枚は。常小御身を放り。あみなのり。たれ。成て。正市  
 と。世代傳へも。是れ。その厚志を謝し。古郷の父かつ。と。白鶴翁の  
 許へも。消息細くと。言かり。たれ。と。なん。明と。延暦十八年。新玉の

春。あゆめ。れ。都鄙。あし。な。て。門。の。松。竹。を。万。代。の。声。を。そ。之。兒。の。う  
 未。通。女。子。の。さ。る。さ。も。賤。さ。も。先。を。饒。て。き。り。羽。根。手。鞠。紙。衣。の。花。  
 陀。螺。竹。馬。の。戯。止。も。いと。廉。な。れ。比。な。り。し。み。右。衛。門。督。坂。上。新。田。磨  
 と。御。子。田。村。磨。今。年。と。や。十。九。歳。あ。も。あ。り。あ。る。へ。月。雪。姫。を。迎。て。  
 御。夫。婦。中。ら。は。は。じ。り。孫。を。も。得。あ。り。老。後。の。娛。た。れ。不。及。と。  
 頻。み。急。ぐ。せ。ま。へ。とも。い。ぬ。る。頃。より。月。雪。姫。仮。初。小。病。あ。の。床。に。臥  
 ま。ひ。し。より。そ。や。明。と。バ。と。と。せ。ふ。成。ぬ。れ。と。う。と。と。茶。爐。小。親  
 る。へ。春。の。心。も。長。余。う。と。て。或。の。神。小。誓。ひ。佛。小。禱。あ。へ。も。更。お  
 其。驗。な。ら。ば。今。と。如。何。とも。な。ま。ま。な。術。も。終。る。深。く。悲。し。む。ひ  
 ひ。と。そ。そ。日。夜。小。種。継。郷。の。り。と。月。雪。姫。の。安。不。を。尋。ず。ま。あ。ま。で  
 あ。て。打。さ。ま。ひ。く。れ。が。或。時。甲。斐。守。照。門。身。り。て。種。の。お。か。り

ありし小菟田磨ハ月雪姫の病年次経れれど。国子ハさうなれり。  
 神佛の力も憑甲斐なれり。打ちあれ語り多くと。照門  
 笑ふ。されどとよ。そのみはきとて。斬りきりたるもの。近と  
 聞われハ。三条橋の辺ハ世代他と。うりた。古き器用を生括とせる  
 者の家ハ。延壽石と。やういふ。不思議の茶石と。そりて。美る。  
 其實ハ。さういふ。知らば。いとも。件の延壽石を。病ハ。人常。子  
 に。添く。弄と。れハ。日形。く。び。て。平愈。よ。と。氣力も。常。より。爽  
 なる。は。し。又。是。次。嘗。と。れ。と。よく。その。人の。餓。をも。救。と。や。誠。の。珍  
 宝。な。れ。は。し。灰。一。仄。ハ。父。ぬ。鬼。子。角。ハ。尋。求。多。ひ。と。其。證。を。挿。し  
 あり。と。姫。君。へ。と。あ。せ。め。の。とも。夫。ハ。御。心。は。任。多。く。し。と。深。切。面。小  
 あり。して。信。や。る。ハ。物語。と。ハ。菟。田。磨。御。飲。浅。く。は。と。く。と。く。教。む

順。あ。る。と。し。と。答。え。人。ハ。照。門。ハ。公。の。内。あ。と。ほ。し。たり。と。歎。び。四。方。ハ  
 方。の。物。語。ハ。時。を。移。して。ぬ。り。た。れ。夫。より。菟。田。磨。ハ。中。謝。小。仰  
 て。件。の。延。壽。石。の。の。世。代。他。が。方。ハ。云。り。多。ひ。て。遂。ハ。高。金。と。出。て  
 買。求。多。ひ。照。門。が。言。し。二。つ。の。社。を。よ。り。く。挿。入。あり。と。照。門。が。語  
 へ。し。小。露。も。違。と。病。ハ。の。人。ハ。此。石。を。身。ハ。添。く。弄。べ。む。不。旧。と  
 快。復。し。餓。る。人。と。是。を。嘗。て。勿。心。その。證。を。得。る。あり。と。い。ふ。と。故。ハ  
 多。ひ。侍。中。ハ。石。井。新。人。貞。直。と。い。ふ。者。其。質。廉。直。なる。と。公。利  
 なる。者。なり。と。と。て。その。所以。を。審。み。云。合。わ。多。ひ。中。納。言。種。繼。卿。乃  
 の。と。件。の。茶。石。を。贈。ら。し。公。置。か。く。寛。く。留。め。ら。れ。し。と。し。と。懇  
 小。の。遺。り。多。ひ。と。れ。ハ。種。繼。卿。も。歡。喜。糾。あり。と。花。人。ハ。巨。細。次。父  
 あり。と。數。度。謝。言。を。述。く。藥。石。ハ。止。め。養。人。を。帰。せ。れ。か。夫。より

自是を携。月雪姫ありしむども解さ示しむ。彼延喜を  
あ人ら進し。小姫君と年を重し。病の尤なり。及ふに  
度うおし。戴とみ。人。多君の深き。おと。し。小田磨の。心志も  
か。ん。な。び。飲。び。あ。ひ。て。是。よ。う。に。耐。も。肌。才。を。放。り。と。其。日。と。暮  
明日。あ。け。二。日。四。日。と。こ。ろ。あ。つ。け。不。思。議。や。精。神。決。ま。く。よ。來。小  
物。食。も。あ。お。五。末。も。濃。ふ。その。味。を。え。ま。ひ。終。よ。一。七。日。と。こ。ろ。頃  
亡。が。如。く。夢。の。ま。さ。さ。れ。が。如。く。陰。陽。の。二。氣。社。上。下。に。回。り。て  
氣。力。に。じ。や。み。十。倍。し。終。ふ。全。快。を。そ。得。ま。ひ。た。れ。姫。君。と。さ。さ。り  
小田磨種継。兩公を。に。じ。め。あ。家。上。下。の。飲。び。更。ふ。い。く。も。あ。ひ  
と。雲。霧。力。と。忽。消。く。朝。日。の。に。じ。め。て。蒼。天。を。照。さ。か。ぬ。喜。悅。の。眉  
を。開。き。こ。し。と。り。あ。れ。是。と。り。つ。る。も。千。手。觀。世。音。の。隱。象。に。信。じ

あひし。より。佛。の。加。護。空。し。か。ら。ん。且。と。照。門。が。志。も。至。る。所。あ。ん。と。  
兩家深くも。觀。世。音。を。謁。仰。し。ま。ひ。た。れ。と。斯。て。小田磨を。急。使  
使。を。り。て。甲。斐。守。照。門。の。め。と。に。の。は。し。を。告。げ。れ。懇。ふ。一。禮。を。述。て  
あ。の。賄。物。あ。り。し。お。照。門。に。却。り。し。と。入。り。た。風。情。あ。り。彼。お。石。の  
る。の。聊。々。傳。う。た。れ。は。不。物。語。也。而。已。な。れ。を。斯。し。て。怒。の。務。り。お  
と。を。彰。ふ。汗。を。れ。る。み。なり。と。て。使。者。を。款。待。厚。く。礼。を。述。く。ゆ。し。る  
か。公。の。内。を。暗。に。計。し。ま。く。或。就。せ。り。と。刑。部。太。郎。と。只。二。人。嘲。笑。ひ。居  
る。と。惡。き。う。り。し。る。も。お。り。去。る。お。件。の。延。壽。石。と。種。継。卿。よ。う。て  
小田磨の。め。と。へ。厚。く。礼。を。述。て。返。さ。し。と。な。ん。され。ば。月。雪。姫。の。病  
頓。ふ。愈。々。と。日。に。健。な。り。し。う。ば。小田磨。此。より。死。父。あ。ひ。て。限  
なく。飲。び。あ。ひ。こ。く。入。專。の。り。な。と。旨。と。元。老。佐。々。木。氏。部。忠。順。



余じて審中贈らばけり。種徳卿も元よりの約束と云月雪姫  
 も今年居特の月の眉先の顔散初ぬ盛なれば速も肯なまひく。  
 延暦十八年の夏より山幸整正ひく。月雪姫の田村磨の元入裏  
 ありりぬお梅と橋の交も香も。形人ぞある筈。峯の間の襖の風  
 ぐらも。洩ぬむりの玉契のぬ。湖中して睡しく在りせ。雨家此歡  
 酔んくく移く。千代万代と榮ひひり然る小善悪も是れどする  
 遇のくく。爰より一の凶事こそ出まれば討する能。天皇の東宮早良  
 太子ハ邪智深く。御公直るれば同志相得の古語のごく。弓木  
 甲斐守照門を深くも愛しむ。暗も早く天下とあらし。石とんとの  
 御謀叛の思ひあれど。元より。天の洩れも。照門あひ。まらど  
 の公を傾けく。仰ぐと。ありりぬ。逆臣ハ諂ひ忠臣ハ良茶の口は茶が

武將蒨田磨のゆの竊小御公小赤がうければ此國が討つる  
 甲斐守照門ハより蒨田磨御父子とあり。まら。彼多  
 なたりのとせ。心も随ふ者も多う。ねとなど。彼浸潤磨受の巧  
 をそしりぬ。遂に照門と公を同ら。あまひ。ろぞ。惜と。た。照門  
 と。合され。此秋早良太子病小。目もひ。る。は。あて。典茶  
 以の移く。と。茶。を。ま。れ。も。元。茶。似。り。な。せ。れ。御。病。な。れ。其  
 驗なく。天皇も宸襟を惱はしまひ。られ。風。与。太子の。御。愛。お  
 蒨田磨のゆとに不思議の茶石ありて。社人の病を拂ひ。餓。止  
 るの妙あるは。次知。せ。ま。あ。昔。あ。て。是。を。傾。中。奉。お。べ。と。由。の。密  
 命。少。り。て。大。伴。高。貫。使。を。差。り。て。坂。上。の。館。小。伺。公。て。ま。く  
 差。上。る。ま。の。赴。ま。を。巨。細。再。傳。れ。お。蒨。田。磨。ハ。色。く。と。俛。思。し。ま

とも。早良太子の尊命黙止がく。あまも御請は奉りて自  
 件の延壽石を携へ東宮の御許ふはかりて謹でこれ我臣  
 新田磨いぬ頃此茶石を奉り入る二年不及る某が娘の病  
 も癒ふ愈その外證のたれり。眼前又つれど。されむとて是を執る  
 りの亦たわらぬ。猶典薬頭その外へも仰りて。其所以を具  
 をも終り尋りて後免も角もはまじと。其所以を具  
 解終りて捧ちまはれしに早良太子の人をりて件の延壽石納め  
 多ひ。その仰りて新田磨の海館あまひられ。然るふ三日と過く。  
 右大臣藤原の是公卿より。御使をりて宣旨のたれ。新田磨を只  
 今糸内あはじとせへ。か何事やと公驚うせむ。取そのも取  
 ども。とせんとせられ。往る御狩の御時天皇より。田村磨を

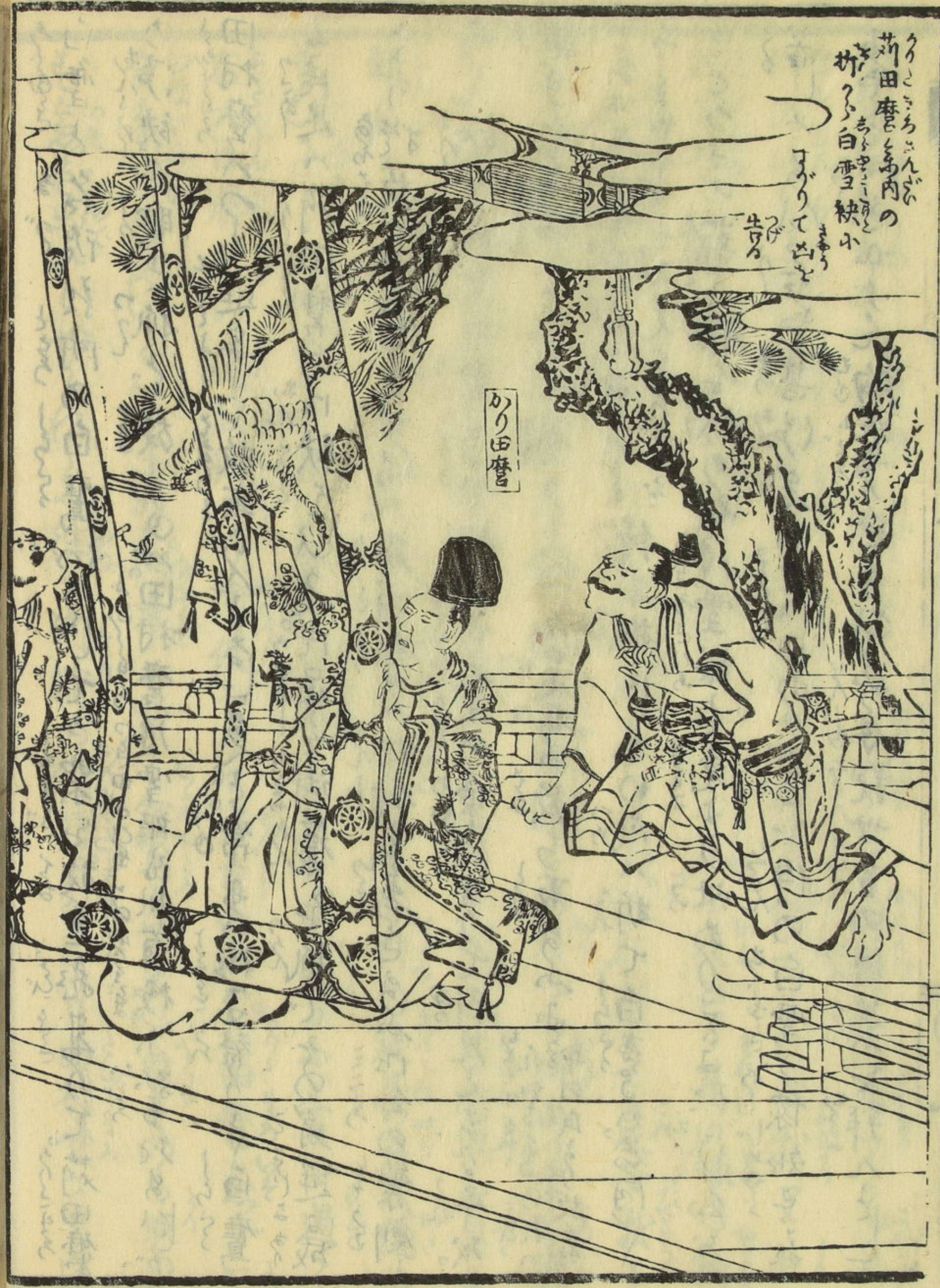
白鷹と名附所。の白鷹いくして。架を放し。花ありて。新田磨  
 の伊袂を睨と。狐を放ち。田村磨月雪姫も此有。扱不。然る。い  
 田村磨いつと進寄。放取らんと。常。女。根子。替り。白鷹  
 と。民足。ハ。新田磨の。伊袂を。ひ。入。足。を。御簾を。扱。で。その。身。逆。成  
 とも。放。ち。り。わ。せ。ね。ば。新田磨。ハ。付。も。と。ま。ふ。公。の。繁。劇  
 なく。汝。と。治。な。れ。禽。多。か。我。大。王。の。命。に。よ。り。て。行。人。と。ま。る。予。次。  
 斯。り。て。不。惱。と。り。ぞ。易。く。と。是。非。不。放。ら。取。ま。ふ。小。中。の。氏。より。放。す。付  
 此。れ。不。後。つ。と。右。の。氏。中。放。す。れ。ども。終。り。扱。に。し。その。氏。ハ。折。て。白。鷹。ハ。同。く  
 ふ。と。や。今。日。と。夫。人。と。ま。れ。ぞ。と。と。こ。る。この。部。は。羽。を。休。め。ね。月。雪。姫。を。先。より。此。あり。ま。は。に。伊。公。を  
 若。し。と。ま。ひ。と。右。や。其。伊。公。お。災。の。あ。ま。と。件。の。白。雪。が。豫。知。を。お  
 せ。や。と。何。と。中。人。胸。驚。う。せ。む。ひ。ふ。手。認。世。音。の。隠。策。を。拜。へ。し



月雪姫

田村まろ

つらとらちんが  
 新田磨とあ内の  
 けいふ白雪あやかし 缺小  
 ふうりていせ  
 せり



かり田磨

あまのこゝろいふ常あ肌を放ちまらぬも。いふ成る子あやされ  
え今日と身小添りねば。人知らば胸を痛しむひ田村磨諸  
とも。今日の糸因を得とて。玉得糸と何うか。奇止りあやせんと  
あま人も。苧田磨と袖を拂く。立出する。是ぞ此世の別。神あな  
身のいふか。後あそびあられ。斯く苧田磨と道を急いで  
糸内あり。右大臣是公郷をじぬ。月郷雲客袖を列て。堅ひ  
大伴貞純。弓木照門も。遥未座あ。其肘是公郷眉を擧め  
と曰。叔も。沙辺の家小所持あ。と処の延喜石と。やいへる。某石と  
人知と太子へ。執也。さありのやと。尋あ。苧田磨回答て。御れぬ  
某近頃。ゆれ所の某石を。太子御夢よ。え。由小と。願望  
せ。め。い。内。向。あ。執。し。を。ま。し。の。仰。を。業。形。の。固。辞。奉。れ。る。ね。も。又

おそれあ。恐懼あ。あれば。とて。い。う。後。の。切。能。ま。れ。某。石。な。り。も。外。の。ふ。も  
違。ぬ。れ。ば。容。易。捧。ち。も。ん。も。い。う。形。ふ。ん。と。百。度。ふ。夜。愚。慮。あ  
め。ぐ。じ。く。も。最。命。頻。な。れ。は。し。あ。ゆ。り。を。し。く。る。春。な。じ。て。奉  
ら。れ。れ。も。笑。へ。て。ん。も。亦。也。と。あり。と。頓。お。捧。ち。れ。は。り。も。  
返。も。ぐ。も。某。石。の。能。ハ。よ。く。諸。人。其。實。を。同。せ。ま。ひ。て。こ。そ  
と。御。請。ひ。奉。り。な。り。と。老。實。面。は。顕。し。く。父。ゆ。り。あ。そ。是。公。々  
又。曰。實。も。御。辺。の。や。う。な。所。も。其。理。あり。然。し。も。その。事。付  
一。大。事。こ。そ。起。り。われ。その。執。ら。じ。延。喜。石。を。典。某。既。且。ハ。丸  
右。の。人。こ。西。之。人。是。を。試。と。く。身。體。を。授。或。ハ。ハ。合。さ。じ。世。ハ  
其。夜。典。藥。頭。を。始。め。試。せ。西。三。人。皆。胸。痛。耐。じ。て。終。ハ。昨。夜  
同。病。死。せ。り。し。み。總。身。皆。紫。變。小。齒。を。か。し。め。眼。を。見。開。き

疑の處もなれ毒石なり。是を打てんば。御辺竊小  
 状らじ。密命とのひみか。其職の人。何とぞ。後小を免  
 小も角母も為るなり。其もも。そと。松小状らじ。君卒  
 と而已いひ。軽々。これ処なり。將太子の御怒り大方。てん  
 天皇。御疑ひ解かれ。其罪逃る。処なし。されば王道。小松が  
 則仁政の本。なれば。教代の名家。惜せ。せま。と。い。とも。生罪赦  
 かく。悪なれば。死を給る。形り。潔よ。切腹。はして。教代。の君恩。お  
 謝せ。ら。是よ。又田村磨。ハ。此。奉。小。拍。ぞ。と。い。とも。父。の。咎。お。洩。れ。と。と  
 社。伊豆。國。大嶋。小。流。と。ぞ。れ。との。宣。旨。なり。其。外。親。族。家。長。小。を  
 仁。慈。を。り。て。御。沙。汰。な。れ。の。旨。な。れ。ば。早。く。其。用。意。あ。ら。じ。と。  
 是。公。卿。と。眼。中。涙。雨。の。と。く。止。り。と。得。あ。ら。じ。と。君。命。を。傳。へ。あ。あ。ぞ。

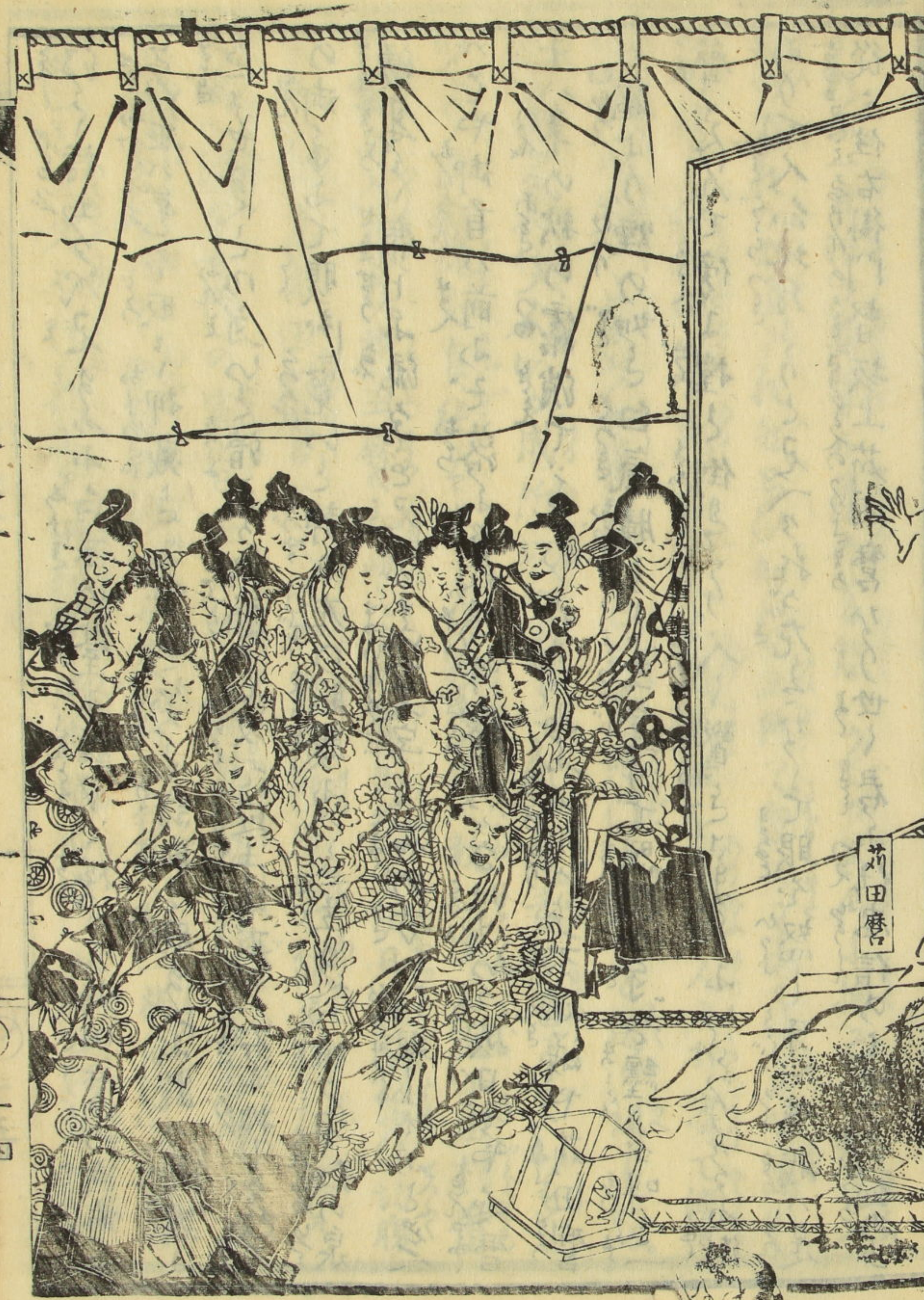
月卿雲客も俱お袂を絞むかりなれ。大伴貞純弓木照門等ハ  
 内公。お。笑。を。會。と。り。とも。同。涙。ふ。か。さ。られ。ぬ。是。れ。と。照。門。と。早。良  
 太子と謀討を合せ。彼。茶。石。を。太子。より。仰。き。暗。小。灸。て。試。さ。せ  
 多。以。故。毒。氣。盛。ん。人。を。毀。し。と。なり。斯。く。荷。田。磨。と。聊。も。悪  
 也。と。ま。つ。と。謹。む。畏。り。奉。れ。と。而。已。御。請。め。て。お。ひ。事。ら。れ。過  
 も。時。至。り。て。天。命。道。な。れ。と。つ。り。思。慮。あ。ら。け。能。返。し。た。ま。ふ  
 御。言。葉。も。形。其。座。に。さ。ま。し。ふ。や。警。固。の。武。士。も。荷。田。磨。に  
 立。御。廓。の。外。に。押。出。し。兼。く。儲。一。夜。の。別。屋。小。と。終。る。用。意。備。り。し。  
 一間。の。下。座。に。荷。田。磨。を。居。ら。せ。た。れ。

第六回 忍夜の跡事

斯く正面を檢使の役大伴貞純弓木照門その外尤右小列居敬

固の武士と帷幕の外に也。今錯の役後、白張の屏風を  
 小引廻し、真白の幕風をあてりて、毎常の浪やまぬ人、其時大伴  
 弓木と言ふを和らげ、斯某等、使の役を蒙る人とも、是非も無  
 るゆしめ、れ責め、中務も、事も、あは、我等よ、れ、お、侍、人、あ、せ、ん  
 と、あ、れ、お、新、田、磨、ハ、心、の、内、お、件、の、延、壽、石、ふ、ら、も、た、こ、と、謂、め、う、ん、れ、を  
 幸と、照門等、し、り、く、と、奸、計、を、設、く、我、を、奔、の、こ、う、救、代、の、家、を、た  
 滅、め、の、ゆ、い、成、怨、の、ゆ、り、て、斯、身、を、計、ひ、つ、り、や、そ、も、我、智、の、足、を、た  
 り、彼、ホ、が、毒、を、お、落、入、と、い、ふ、も、家、を、亡、と、お、至、道、の、ゆ、れ、口、か、し  
 こ、よ、此、怨、ま、ど、う、其、侍、お、盡、さ、と、や、と、張、割、は、胸、を、静、め、あ、ひ、甚、口、へ、  
 曰、この、班、ま、至、り、て、も、我、各、の、厚、志、い、つ、む、り、身、お、悔、り、今、更、中、残、と  
 へ、と、奉、し、な、れ、と、去、ま、が、り、筆、紙、を、界、給、う、ば、一、首、を、残、し、と、せ、  
 横

等への、道、も、さ、し、て、ん、が、此、事、い、う、あ、あ、ん、と、同、ま、人、ハ、貞、純、照、門、を  
 合、その、事、而、已、お、い、ひ、を、何、久、苦、し、か、ん、某、等、より、能、お、田、村、磨、へ  
 何、久、苦、し、せん、い、ご、と、と、毛、頼、文、池、を、新、田、磨、の、前、お、進、め、ま、  
 せ、ま、お、辱、し、と、宣、う、と、書、終、り、た、ゆ、が、是、を、田、村、磨、へ、つ、て  
 め、られ、と、差、出、し、め、め、を、取、あ、げ、こ、え、  
 かり、その、ゆ、い、と、い、路、と、ぞ、お、い、ひ、  
 此、歌、ハ、是、在、原、の、あ、げ、る、が、甲、斐、國、お、あ、ひ、知、り、て、け、り、  
 と、て、ま、う、け、れ、道、中、お、て、俄、お、病、ひ、重、た、し、ま、く、と、お、り、  
 古、郷、の、母、の、り、と、お、送、り、お、れ、  
 なる、御、ら、後、お、や、筈、と、は、し、ま、ひ、ぬ、る、  
 じ、と、も、斯、く、時、刻、う、り、  
 貞、純、照、門、  
 一、圓、お、



新田啓



大伴貞純

新田啓  
別屋にて  
生害と

弓木てる



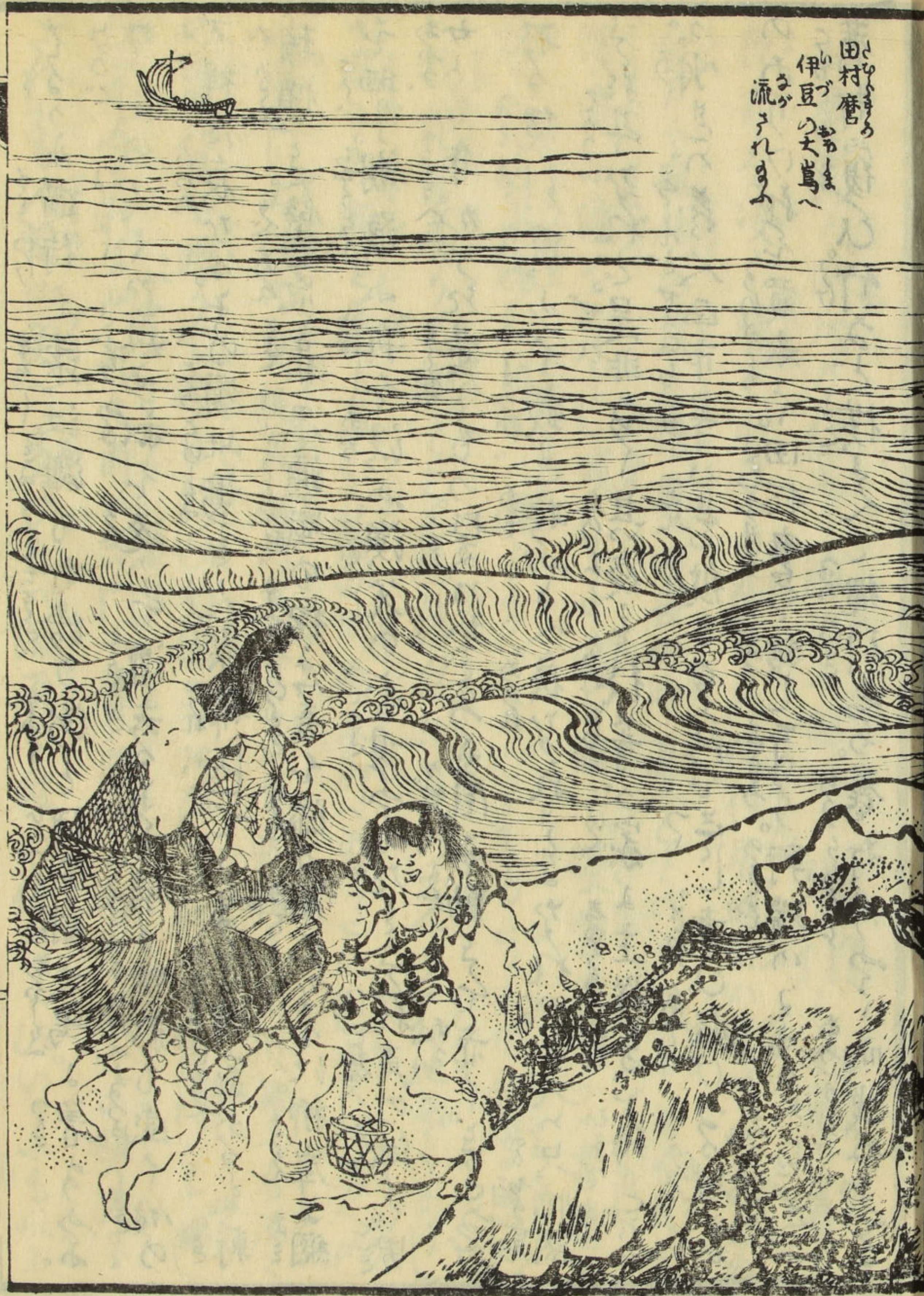


ぼよりろりと半打伏す。號哭の声地を動とも理なり。田村磨  
 とありりのつひ唯惘ふあきて暫言も出たり。漸  
 溢れ涙を押し拭ひ語を演んとほし。今更何ぞ此場かおかく。白を  
 言波うへへ。暇く何談ふれ謂ふし。將此一首と新田磨死に臨んで  
 書せられを我に心み汝はつらり届ふあり。今日只今より我人  
 とつるる田村磨なり。早く配所へ赴くべしとせよ。支止は貞純の  
 とも。小随ふ族ぢらんとと支重は田村磨を引立行人とせよ。月を  
 娘とのみ愁や情の人のよ父とも憑とあふを其男の心す。寛  
 の罪は御生害なしまひ。長と別となりぬる而已。我夫も遠  
 鳴り流されも人とも。そも何事の故あこそ。此上へ虎野野廻舞あれ  
 浦なり。と妻一人残れぬ。警命の緒と殺れとも。何所もかくあを

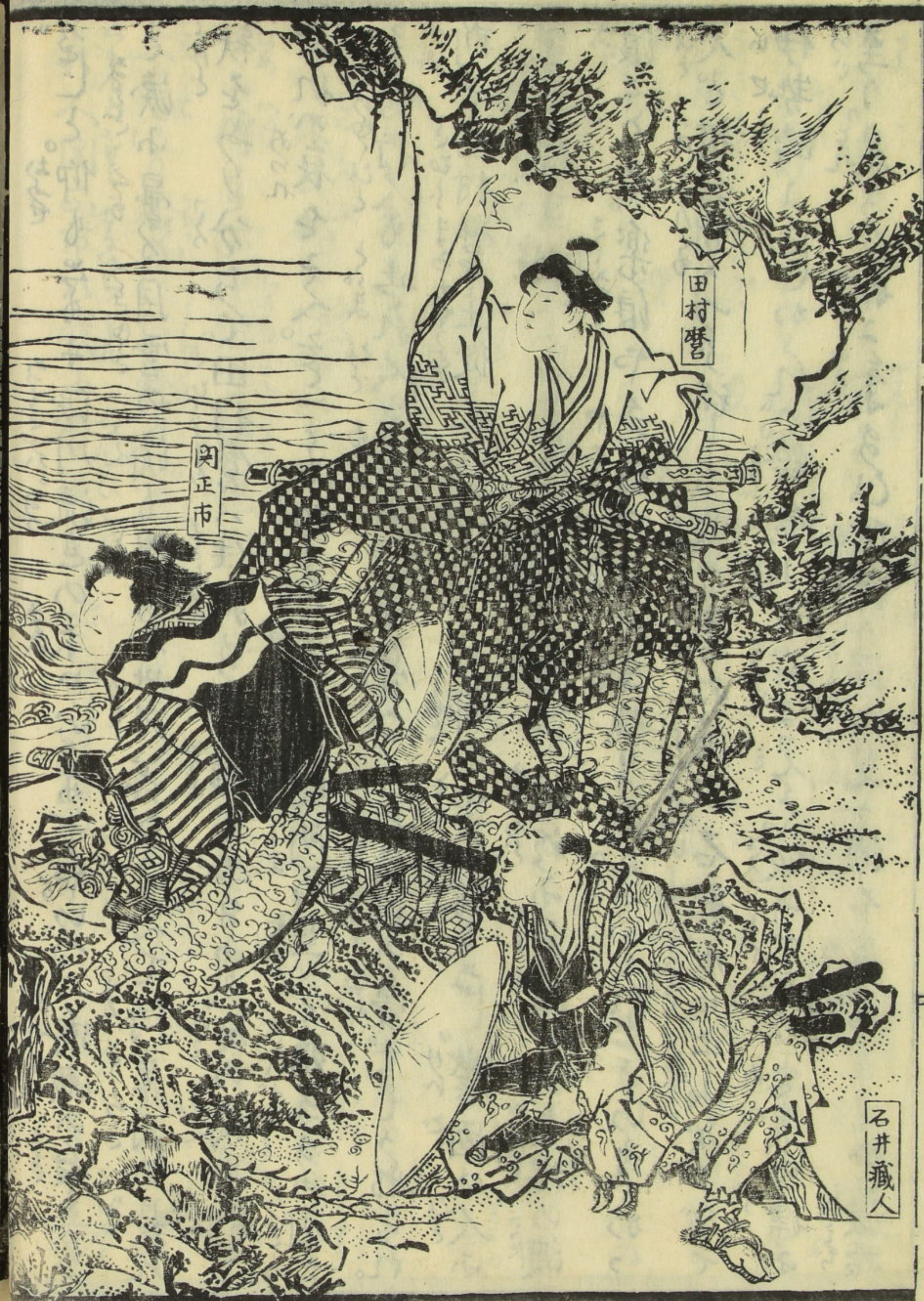
離れろとせんと宣ふ声は涙お夫とせよと艶と御手お田村磨  
 の細おひらりもひ殺入る。つらりも數とあつても理と。あそのつらり  
 哀は形り。田村磨も御声曇り。父上年頃日比忠義の心おかく。  
 彼葉石を余も應じて領お然らじしも。太子の病ひ早くも平  
 愈あひせまると一節おひらり奉記。少しく御過われぬ  
 心身を亡し家を知ひまの至れへ何のつらや。そも中お奸邪のこの  
 ありて當家お怨をうるととせたりと。半日と元老佐木民部忠順  
 進出。両眼涙腫もらそ双をけ久。らん君あ物も狂もろ。先君  
 罪在はこそ其怨を蒙りまわたり。今更何ぞ此場かおかく。白を  
 論し黒を算る。つらり。今更何ぞ此場かおかく。請ありて配所の地へ赴くま人と。  
 目眸をりて田村磨お夫と言ねどおつけ奉らば早くも其心

赤しゆひいへも宜旨と蒙るる人の免や角といふ人もいへる今  
 への忍めり。さうく彼地へ越へし去りて爰に二つの願あり。一つは父  
 前田奮の遺骸を厚く葬たく。又一つは遠つ嶋の島に於て一兩筆の  
 家臣とぞ行く人を免りんやと仰めぬ。負託之ら。其二の  
 るへ望むお任せしけれども。葬のれを行へしと夫も。日を費さる  
 と叔おれ財を移るるごふけしむ所なれば。珍なる者も託し金で  
 早く。養ふべしと教夜の女。但不足非も。ゆりて各残の世と  
 依く木民部。何れと跡のゆも。そとて。中納言種継。郷の許小房。て。志は角持節を待た。又  
 姫の傳多し。中納言種継。郷の許小房。て。志は角持節を待た。又  
 天皇より。始りし。白雪の。月雪。姫民。諸も。大切。心を。ほけ。石井  
 義人。関山。市ハ我小。扈。後。あへし。その。竹の。家臣。ハ一族。く。おま。退

色しと。仰もとも。涙川。流。の。未。い。う。み。ぞ。や。り。つ。連。瀬。の。村。も。が。さ  
 と。涙。お。曇。る。月。雪。の。消。も。果。る。ん。此。月。を。さ。が。う。て。待。年。月。の。長。れ  
 袂。を。り。分。ら。て。田。村。磨。ハ。住。訓。多。し。誰。を。出。る。あ。庭。の。梢。も。別。と  
 な。れ。ハ。哀。を。そ。へ。そ。こ。も。知。ら。ぬ。大。嶋。の。配。所。の。空。へ。旅。立。る。の。脚。を  
 そ。其。行。人。も。止。れ。人。も。哀。い。う。み。夢。の。ね。浮。世。の。夢。ぞ。と。う。好。ま。れ  
 斯。く。田。村。磨。主。從。之。人。ハ。す。ゞ。と。都。の。空。を。跡。ま。し。警。固。の。人。ハ  
 導。と。伊。豆。園。へ。と。と。後。じ。羽。暮。し。て。行。程。お。え。涙。せ。ハ。矢。搦。の。渡  
 浪。と。人。も。樂。浪。や。矢。橋。の。舟。れ。出。ぬ。り。う。小。家。お。れ。じ。と。い。き。か。つ  
 人。と。彼。公。朝。つ。つ。孫。し。も。我。ハ。哀。が。ね。旅。衣。石。部。水。口。土。山。次。と。ぞ。て  
 伊。勢。踏。ま。し。か。れ。ハ。鈴。鹿。山。を。右。よ。り。坂。の。下。より。安。農。の。津。子  
 至。り。是。より。松。葉。多。し。阿。漕。が。浦。二。見。が。浦。を。馬。子。よ。り。は。浪。踏



田村磨  
伊豆の大島へ  
流されし人



田村磨

岡正市

石井藏人

とるるか過行を遠江灘も打送り。潮と伊豆國大嶋も著るふ。  
警固の、くくハ直少松を返、と漕去るふぞ。帰る帆影も遠く付の  
不祥を哀なる。その頃此嶋を人家稀にして。とま、澳家あるも軒  
端傾き。壁荒果只浦風の松よ響を添る而已なるに。柳岸よ網  
を晒し。潮痕小舟を洗ぬ。澳父の音唄も。たこ、れ声の淋しく。男  
女とも弁がら。兒童ももの。髪ハおとら。風中動きて赤く。とこ、あひ  
形る縄引違、く戯もたぶと人哀なれ。さまなれば。と人ハ只茫然  
うた斗なれ。是非あり。其夜も伎等が家よ主従交を結ぶ。とら  
が。明とハ。お人ハ。市等ハ。是彼とら。後と。幸ハ。怪げある。彼家  
のあり。びねを買承く。田村磨を移して。軒端の。とら。ハ。自足ハ  
薦打覆ひ。竹ま。と。横く。一。縄引。ち。藤打。拂。く。雨。洩。ぬ。ま。ま。

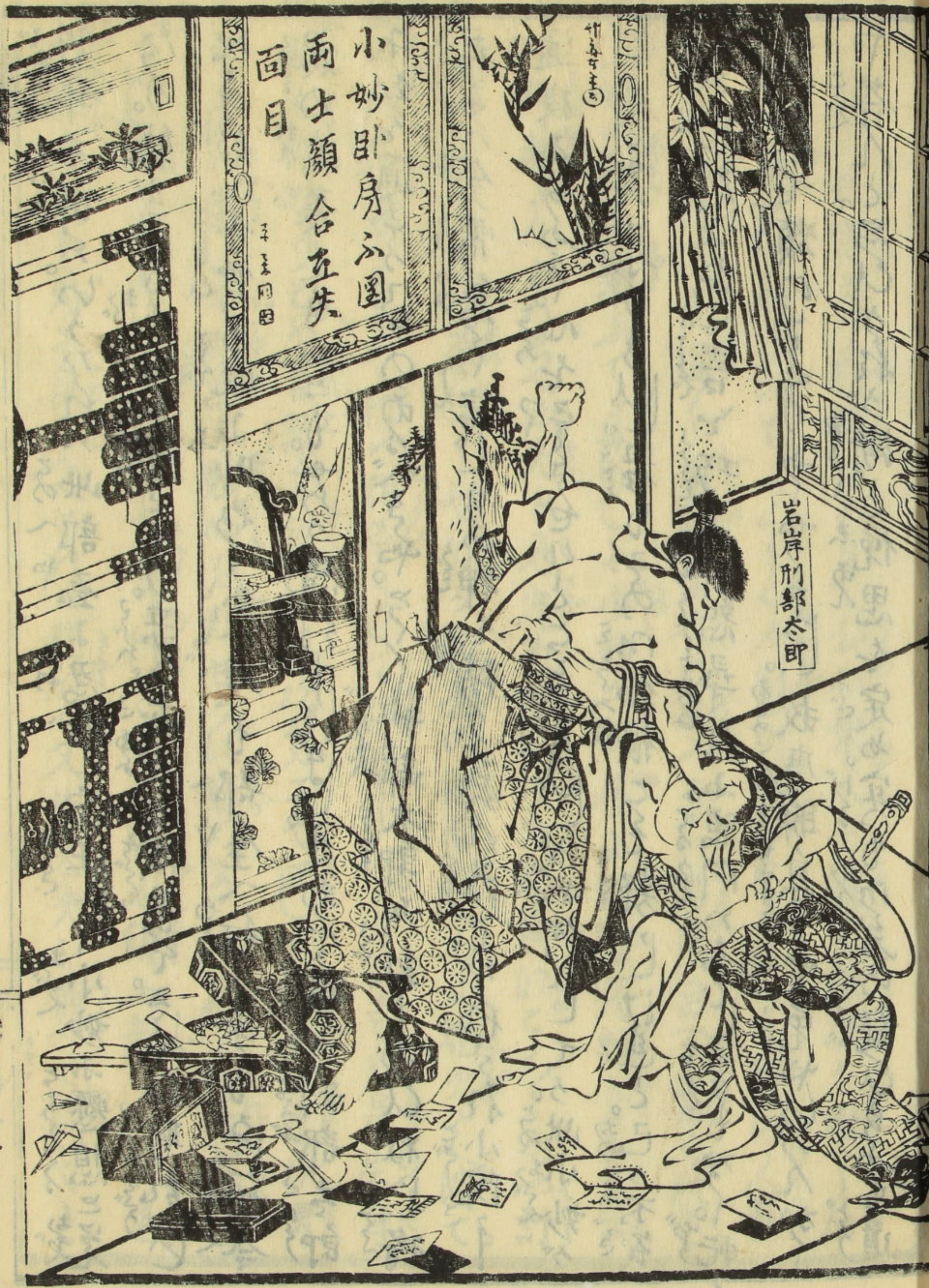
と成れど。間成りれ。馬の浦風ハ錦の戸張より引きて。蓮の簾も  
夜寒を凌ぐ。媒と。あるハ。甲斐な。れ。住居。昨日ハ。雲井の。乳。お。笑。  
今日ハ。孤嶋の。月。子。怨。夢の。世の中。憂。と。の。う。れ。が。中。も。且。ハ。  
濱邊ハ。澳。を。と。し。或。ハ。ま。武。を。講。ハ。螢。雪。ハ。窓。ハ。書。籍。と。  
論じて。心ハ。漆。ね。月。日。ハ。過。ハ。ま。ひ。たり。さ。て。も。弓。木。甲。斐。さ。る。照。門。  
ハ。我。能。み。居。り。て。漸。と。と。落。付。只。妾。の。え。ん。る。お。地。お。あり。  
ハ。速。ハ。志。願。と。遂。ハ。と。故。ハ。刑。部。太。郎。へ。あ。ま。この。恩。賞。ハ。あ。ハ。已。  
ハ。組。せ。ハ。大。伴。の。貞。純。大。伴。の。高。貫。さ。を。も。招。き。て。彼。等。ハ。も。あ。  
の。寶。貨。と。贈。り。て。傷。ハ。飲。び。の。酒。宴。ハ。な。し。た。れ。悪。逆。の。殺。と。師。  
け。と。あ。り。た。刑。部。太。郎。ハ。照。門。ハ。妻。白。波。と。僧。老。同。穴。の。契。浅。を。  
され。も。人。目。の。園。の。多。け。し。ハ。流。石。と。流。の。佐。つ。は。い。く。ふ。も。此。上。

照門をなれ物として。よまど掌しやうお握にぎてんといかりのつも。その便べんも  
 打過うち々つれ手て。つらも忍しのぶ夜よの白波あきの左右さう人にん小妙せうといふ道みち  
 て彼かが部屋へやあて白波あきと忍しのびあへし。つらの終はつめ照門てると此こ小妙せう  
 の顔かほ色いろあはれ小懸想せうして。手てをか忍しのぶ久く威いつ。どけしつ口説くちども。  
 小妙せうと角かく言ごん拵しやう。當あり障さやを其その場ば。対たいしつれ終はつ。  
 く照門てるの公こうせまり。此こ上じやうの是非ぜいお彼かが卧房わふやう入いる。我わがら終はつの浅あさ  
 心こころをも染しんと熟じやくらんぬ。なごる一いつ点てんの情なさけあはれん彼かも。  
 赤心せきより我わがの敵てきつあもあはれは。好このま。我妻わがつまの面おもてと兼かねぬれ。  
 請こたへうがれも謂いわふは。非ひと。己おのら終はつお自他じ成じやうりて。獨ひとり  
 うみづ。或ある夜よ白波あきお語かたて。吾われを今宵こん兼かねる。信しんじる神かみお拵しやうて。  
 いうあも公願こう成就じやうを終はつんぬ。放はなれ小院こゝろふ宿やして宵通よかど

子こんとぞあ子細こあれハ御ご身みを我わがと待まちして早はやとく卧ふ人にんとく。  
 常とこよりも終はつと清きよめ衣服いふくを改かめぬれとえより其その丈だけ低ひく。飽あまで  
 肥こ大おほりて肩かたのしつぬ。我わがと我わがと愛あいをぬ心こころより竊ひそかぬ。  
 鏡かがみも恥はるるみなく。別殿べつはして出行しゆぬ。白波あきの渡わたり舟ふねのあふ出いる嬉うれ  
 あこと。今宵こんの首尾くびの又またと終はつあもあはれは。く消け息そくとま。  
 刑部けいぶがえよひまりて。三更さんの鐘かねを相國あひは小妙せうが部べをひて。い  
 そのあら。忍しのび達たんとあはれぬ刑部けいぶをそれとやうりも。い  
 かに首尾くびを認たびて返車かへの文ふみよ公こうを。時とき刻こく選せんと待兼まちつ。  
 二更に更まる。早はやくも小妙せうが部屋べやへと忍しのび入いぬ。照門てるハ斯かそのあ  
 ど別殿べつありて。静しずけ時刻ときを考かんへ冬ふゆの夜よれ待まち少すくハ長ながれ。あ  
 の園のぞく。の園のぞの技足わざも。我家わがやの角かくの音ねふ。又また裏うら胸むねの技わざ。

男、馴、勝、手、の、小、妙、が、都、を、燈、火、消、し、天、の、助、け、結、ぶ、の、神、の、引、  
 合、せ、欽、今、宵、此、首、尾、の、吉、兆、な、ら、う、と、一、歩、を、上、ま、し、一、歩、を、扱、入、十、辛、  
 万、苦、の、灘、を、こ、小、妙、が、都、屋、よ、入、れ、何、や、ん、此、方、の、角、小、人、を、  
 忍、ぶ、足、音、す、れ、が、い、り、し、と、い、ふ、人、も、若、く、は、小、妙、の、早、く、も、我、と、推、  
 察、し、て、お、も、と、ゆ、さ、に、隠、れ、し、や、道、の、せ、じ、と、探、り、し、て、卧、房、の、中、に、  
 手、に、し、入、り、考、え、し、通、り、し、入、醒、中、に、お、の、空、蟬、の、床、の、中、に、さ、て、  
 こ、そ、彼、が、聲、を、も、舉、げ、ぞ、恐、れ、し、の、既、半、の、大、成、就、せ、り、九、あ、ら、ば、  
 探、り、あ、ら、じ、と、目、刺、も、知、ら、ぬ、都、を、の、う、ら、に、大、手、と、ひ、ろ、げ、忍、び、く、い、  
 尋、ず、り、に、左、と、探、し、右、小、替、と、忍、び、の、足、音、照、門、と、あ、ら、り、に、公、忙、に、  
 暇、と、取、り、の、口、お、し、さ、よ、と、何、ひ、さ、ほ、し、て、飛、り、い、ら、ぶ、と、ま、し、た、  
 大、男、の、り、れ、節、く、松、の、樹、の、柱、も、か、く、や、と、照、門、の、大、お、駭、と、い、ふ、妖、怪、

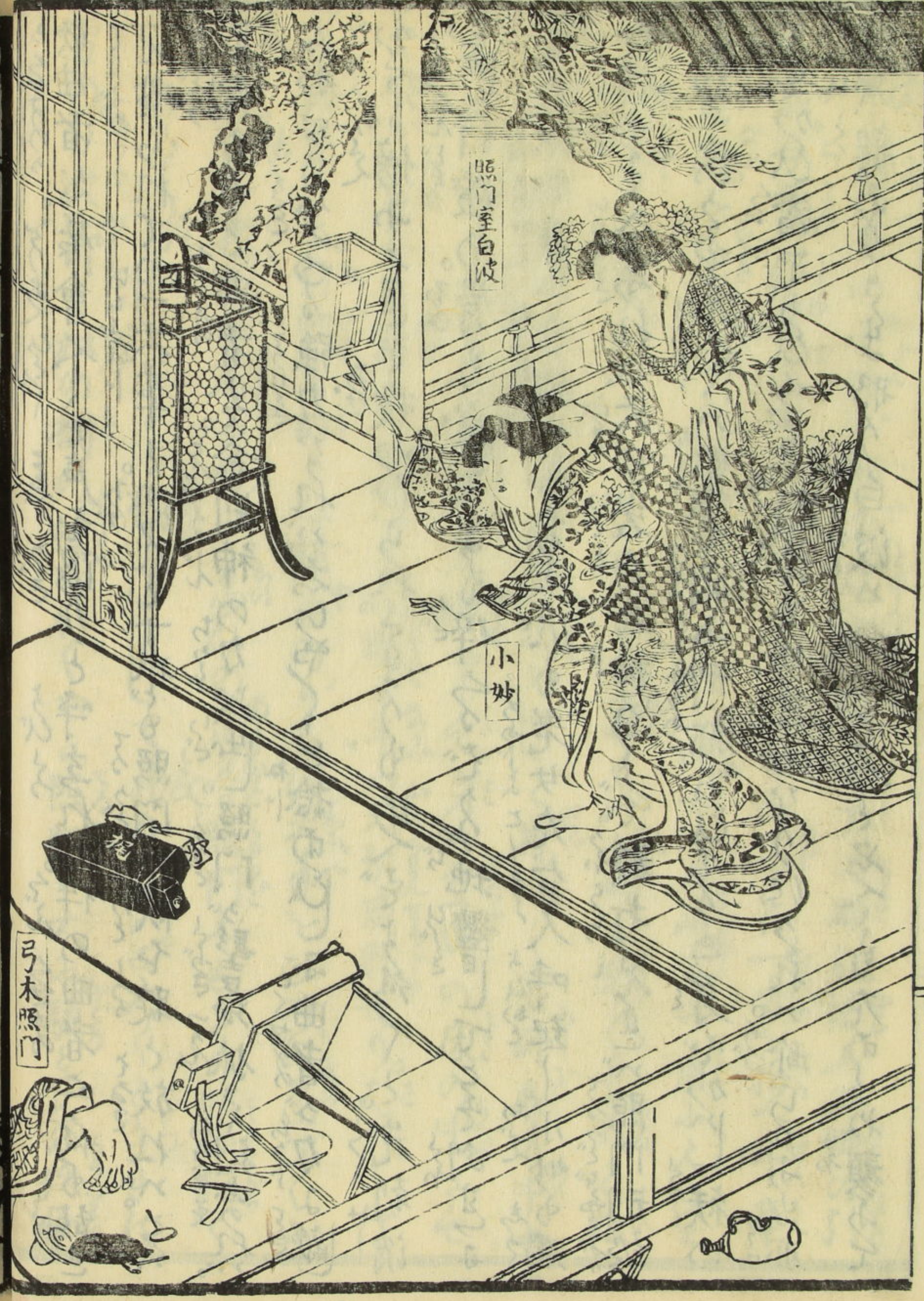
欽、曲、者、の、居、會、人、と、声、を、限、り、と、呼、ま、れ、ば、件、の、曲、者、と、後、も、乱、と、  
 又、答、ら、れ、て、一、大、事、と、逃、ん、と、す、れ、も、照、門、の、袂、を、睨、と、放、ね、ば、こ、の、  
 面、倒、な、り、と、曲、者、と、金、剛、神、の、力、出、し、照、門、が、髻、髪、抓、り、引、き、お、れ、  
 と、お、こ、も、は、ゆる、強、力、な、れ、ば、あ、り、や、と、捻、め、し、小、曲、者、が、カ、子、歐、  
 か、く、傍、お、こ、と、と、投、つ、け、ら、れ、と、ま、り、も、あ、ら、じ、と、先、刻、消、  
 滅、し、行、燈、の、骨、も、身、も、よ、も、碎、ら、る、む、り、地、盤、目、し、て、こ、そ、倒、し、し、母、  
 去、れ、此、物、音、小、白、波、の、公、あ、ら、び、も、老、女、左、右、人、呼、起、し、小、妙、も、燭、  
 を、持、ち、入、り、あ、れ、ば、天、の、岩、戸、の、神、あ、ら、じ、と、顔、打、ん、と、照、門、刑、殺、  
 こ、ろ、い、う、あ、と、人、の、驚、く、困、不、刑、部、の、ひ、り、と、身、を、か、し、袂、の、  
 下、と、か、ひ、潜、り、し、く、行、情、も、知、り、と、な、り、に、お、れ、ハ、珍、ら、う、あ、り、亦、  
 願、解、あ、り、と、ま、形、り、白、波、の、公、お、こ、と、あ、ら、じ、も、左、あ、ら、ぬ、顔、あ、て



小妙部屋不圖  
両士顔合左失  
面目

竹五子主

岩岸刑部太即



照門室白波

小妙

弓木照門

刑部右衛門。いふなれば此部至も忍びや。正しく小妙も懸想と見えたり。然れども小妙ハ幼きより。妾が左右も成長て。その公聊乱れぬるや。今宵も既も卧ゆる。一度も部屋へ行つてもは。假令君の意慕しあふも。やう請引中は。は。ま。か。て。醜き刑部を郎あ。を。通。さ。る。の。の。あ。る。べ。き。や。さ。く。刑部太郎外。あ。ひ。ね。じ。将君。あ。今。宵。兼。て。信。じ。ま。の。神。を。禱。り。ま。り。ん。為。と。な。れ。と。れ。小。院。へ。通。夜。去。ま。あ。ま。心。を。そ。と。せ。ゆ。と。こ。を。宣。ひ。し。が。何。は。して。う。此。小。妙。が。部屋。あ。り。ま。り。あ。ひ。君。も。その。以。公。根。こ。を。疑。い。け。し。と。己。が。不。気。を。余。所。よ。ま。し。言。を。巧。ま。打。怨。尋。ね。お。照。門。の。あ。じ。言。も。な。く。忙。然。と。して。頬。の。つ。り。や。あ。ま。は。救。度。瞬。息。し。て。免。や。り。ん。か。く。や。答。ん。と。あ。ひ。な。れ。が。漸。と。後。思。を。定。め。実。も。あ。の。疑。ひ。ま。あ。も。道。

誰か。れ。が。我。宵。より。別。殿。あ。り。て。公。お。祭。丈。を。讀。み。丹。誠。を。凝。し。居。る。お。奥。の。と。れ。と。ん。ち。と。人。影。の。ふ。り。に。正。しく。男。の。人。影。な。れ。が。外。の。外。不。夜。深。く。奥。向。よ。り。の。出。入。を。疑。ひ。し。と。不。審。な。れ。と。暗。ふ。その。跡。を。慕。ふ。て。あ。り。し。お。小。妙。が。部。屋。へ。何。を。え。ん。物。音。を。聞。か。人。を。呼。起。え。ん。と。あ。ま。と。夫。と。定。め。る。も。あ。ま。と。い。ふ。計。え。も。い。う。お。ん。と。忍。び。し。て。彼。が。部。屋。の。裡。を。窺。あ。ま。燈。火。を。消。て。盗。人。の。忍。ぶ。る。ま。な。れ。が。組。留。し。に。と。ら。れ。も。是。岩。岸。刑。部。太。郎。な。り。と。い。言。語。を。察。し。れ。次。弟。あ。て。正。しく。小。妙。が。忍。び。男。あ。ま。あ。の。果。して。刑。部。が。賊。心。を。起。せ。ら。に。疑。ひ。し。し。て。足。を。捕。て。糺。さ。し。と。ま。き。に。表。の。方。お。走。り。行。く。その。驥。を。頼。み。静。か。に。と。刑。部。右。衛。門。の。免。お。角。を。え。が。れ。刑。部。が。父。権。太。夫。を。捕。へ。て。色。く。と。



尋問小権太夫と刑終申の替りて公狭き人なれば大お忍懼心を  
 苦しむ某うめ刑終太郎が才持の不善のあれは極小折よあれは  
 おきて教諭を加へ若る小導ゆへとも面めん得心せる色を顯せとも  
 ありてこそ爲を改む逐めんかされしは物事にして父おまて面なれ目  
 見えれ不孝者よと怒りつ侘つ回答も入派はしむむじりり其  
 夜終小権太夫を自殺せしとそ不便なりしむもなり是ひと小  
 刑終太郎が至悪より親をも亡人の救とほしめる天罰いくて逃れ  
 るのあふんや斯て照門ハ此上を強て爲求むは祓の罪もあふれば  
 ぞく其あふんを打過されとなん去後小岩岸刑部ハ小奴が部を  
 を走り出我宅小帰ししがこ後忙しくあり合少しの金銀と衣類  
 等も手あて次第より引擲くそこそ知も走り出しが都の内

後わさやとひんん是より伊勢國へと志し縮地の妖法を行ひ道  
 急ぎて走の行多れお災行もなき勢別鈴鹿山の麓小至りるお  
 頻り中心地燃しく發熱して終身瘡疾お漫且一歩も行くと  
 終つてえ身止れ所を何の方へと志せしゆもあふん急迫道出  
 たる旅路をれハ如何ともせんさ好く山の木陰は破れれ過堂の有  
 多小宿りて自病を厭めてありたれが其夜三更さる比雨之人足  
 音外面お響れそ何ぞん軒りる月お過堂の裡を何ん松子あり  
 が其内一人がいつるを寝なく鐵棒二もあふんさに俱よ力を合さ  
 彼いうる勇力ありそお忍々に足どまど語めお又一人いへら  
 何ぞ銃を待へそや我等二人が手を下えお首尾せざるやあ  
 と勇進をいやく一人も多とこそ仕扱せられか上策あり勇威の

誇るむうりなれを。知謀の人と云はし。と争めて止むるころは  
 一人の大男彼方より来りて汝等職分を捨て捨置く何れを  
 争めぞ既ハ四更の理も近うなると物語ハめと度々明  
 くとすれやと問む。人曰く掛へ声をひそめて汝こそしづこ子を  
 ぞりて運りしぞ我ハ今宵と社そのもるしづがゆりも目  
 小少しの宝をえ出ししれど。あましくなれぬ奴と云つ且む汝は待て俱  
 み毎々下ると先より其のゆを語りぬ所なり。看かこ不卧し  
 たる旅人こそ。四人の酒錢を不足めじこおりのなり。いと働かんと  
 四人の山賊一なふぢのつと堂の古戸を蹴放し飛込んでとら  
 と立かたてカハはうせと押てられバ。實逞し旅客されと身を  
 とあくと震とるに。山賊もハ嘲笑ひ。汝も一回中ハ似げられた

病ものよ。我等の勇威も畏れど。かくはて齒の根も合はれぬの  
 人ハえうけ寄され物と。よくとんとハ瘡疾あく。回答えん病  
 居り。四人と今うてまらねく。ハツの目と目ハ見えぬ。右い  
 ね笑つてしづりたれを。餘り大車取られぬ。かれ始末のおいし  
 さよ。仲間の者へあり群ハ語りも我等が面ゆせ。比真といつて笑  
 へんも。讚美され沙汰しぬれば。又も笑はがみいけられ。か  
 時ぞ移らんしづらば。裸ハして剥ゆん後。這奴ぐるめゆら  
 行く。奴がとろのハハ寄仲間あかるとも殺とも。その返答ハ  
 任んか。いと共さ物がりや。笑つて刑部ハ思慮ぬく。双を合  
 くりしむたれハ。御辺とら我命ハ助なき。仲間のハ扱置  
 朝々電の世話なりとも。牙ハ墮く。願ふことに。御辺達の住家

不連行くまより進りし五鉢叶りごと行歩もろろゆき仕せ給は。おと  
 に頼りかたすれと。折入るこそ憑りれ。然るば兔よ角連行  
 へし。明らも程もあざれが。急いで山不帰らんと。四人ら奇引  
 寒く。山路をばして走り行ね。

田村物語卷之三 甲

